

# インフルエンザワクチンについて

【特徴】毎年、早期に流行してくるA型《H1N1株（旧ソ連型）とH3N2株（旧香港型）》の一般的な症状である発熱や咳などの主症状は軽くなりますが、B型《山形株とビクトリア株》でよくみられる嘔気や嘔吐に対してはその効果は多少弱いようです。毎年、流行しそうなインフルエンザウイルス〔株と言います〕をWHOが地球規模で予測にして、それに基づいて製造されているため、その予想は大きくずれることなくほぼ的中しています。A型2種類とB型2種類の合計4種類の株が含まれています。ほぼ的中した株の抗体がしっかり上がってくれば、罹患しないのではなく罹患した時の症状を軽くする効果を期待されています。他の原因によるインフルエンザ以外の冬の風邪や肺炎などには効果はありません。

【副反応】接種当日か翌日に、接種部位が赤く腫れて痒くなることがあります。2-3日間続きます。翌日38℃程度の発熱や軽い風邪症状などが稀にみられることがあります。特に年長児や成人では比較的多いようです。極稀にアナフィラキシーショックが報告されています。接種後15分程度は注意してください。

このワクチンは、鶏卵を利用して製造されるため重度の卵アレルギーの人は接種ができません。軽度なら接種できますが、心配な方は皮内テスト後に接種しますのでご相談ください。接種当日に100倍希釈したワクチン液を皮内に注射して15分後に判定します。別途400円かかります。

【接種時期】13歳未満の小児では、通常10月下旬から12月中旬までに、約4週間（3週間～6週間）の間隔を開けて2回接種します。効果は4～5ヵ月間は持続するとされています。

生後6ヵ月から接種可能ですが、卵アレルギーの有無を確認できる9ヵ月過ぎて離乳食が始まってからが安心です。13歳未満の小児や20～30歳代で久しぶりに希望する方または病気がちな年配の方たちは、余裕を持って2回接種してください。毎年接種している小学生以上の小児や13歳以上の方は1回の接種だけでも効果が期待できます。健康な成人や高齢者の定期接種の方など、1回のみ接種希望の方は、慌てて早期に接種するよりも11月下旬から12月下旬までに接種すれば、より効果的です。また妊娠中の方でも妊娠中期以降では積極的な接種が推奨されています。ご相談ください。母子手帳や接種記録があれば持参下さい。

流行が始まってから慌てるより、しっかり準備をして早めに接種準備してください。特に受験生は、目的の日に合わせて準備して下さい。高齢者では、2種類[13価と23価]の肺炎球菌ワクチンとの連携が大切です。

【インフルエンザワクチンを接種しておいた方がよい人】

ハイリスクの人（感染すると危険な人）

- ・65歳以上の人
- ・老人ホームや慢性疾患施設の居住者
- ・慢性の呼吸器疾患（喘息含む）
- ・循環器疾患や糖尿病などの基礎疾患
- ・基礎疾患のある乳幼児（心臓病や熱性けいれんなど）
- ・長期のアスピリン療法中（リウマチ熱や川崎病の小児を含む）
- ・流行期が妊娠の後期にあたる妊婦（心配な方はご相談ください）

ハイリスク者の周囲の人（感染させる危険のある人）

- ・医師や看護師など医療従事者
- ・老人ホームや介護センターの従業員やボランティア
- ・ハイリスク者の家族

希望者（感染したくない人）

- ・受験生（中学・高校・大学・その他）
- ・自治体や公共サービスの従業員
- ・仕事や学校を休めない、あるいは休みたくない人
- ・予定が詰まっていて忙しい人

【医療機関向け】年長児や成人で、今年は1回法か2回法かの選択に迷った時は、或いは毎年接種時の発赤腫脹で悩んでいる時は、HI抗体価を11月になってから検査します。11月からは今年のワクチン株を抗原にして検査するので有用です。80-160倍以上もあれば今年の接種は不要。20-40倍あれば1回の追加で大丈夫と考えます。小児では初回の接種日に採血して検査すれば有利です。予防接種医に相談ください。